

概念を取り払って

千葉県 木更津市立木更津第一中学校 3年

金子 華音 (かねこ かのん)

「男の子はあちらの列です。」

小学校入学式の受付で、私はそう言われました。髪は短く、男の子用のスーツを着ていたので「男の子」と言われても仕方ありませんでした。私にとっては、大好きな兄のお下がりを着られることが、当時は単純に嬉しくて、そこに違和感や嫌だなという感情は全くなかったのです。ただ、実際に入学して学校生活が始まると、嫌な思いをすることがありました。普段から男の子のような服装だったため、「女子トイレから男子が出てきた！」と廊下で叫ばれたことがあります。その時、イラッとしたことを覚えています。

また、私はサッカーをやっているのですが、週に一度電車でスクールに通っていた時期がありました。駅でトイレに寄るたびに、知らないおばさんから「ぼく、ここは女子トイレだよ。男子トイレに行きなさい。」と注意をされたのです。おばさんの言う通り男子トイレに入りましたが、誰からも何も言われませんでした。小学生だった私は、次から駅では男子トイレに入ればいいのかと思いました。サッカーで大会に参加した時には、試合中に相手チームのベンチから度々「女なんかに負けるな。」という声が聞こえてきました。「負けるもんか！」と悔しい思いはしたけれど、相手の男の子が「え？女だったの？」という顔をした時や、「女？」と聞かれた時は、気づかれなくらい男らしいプレーができていたんだと嬉しくなりました。

私は男の子に間違えられることが嫌だなとは思いませんでした。自分が着たいものを着れば良い、やりたい髪型にすれば良いという考えを持ってくれた、母のおかげかもしれません。家庭で否定をされなかったのも、「嫌だな。」という感情に至らなかったのだと思います。

多くの人を持っている「女らしくスカートを履きなさい」とか、「男なら強くなきゃだめだ」という固定観念は、取り払うべきです。時代が変わっていく中で、女性がバリバリ働きに出て「主婦」ではなく「主夫」が流行っている現在、だんだんと、昔ながらの性別の決まりのようなものは無くなってきています。今はまだ、常識に差がありますが、あと数十年もすれば「男のくせに」「女のくせに」そんな言葉は無くなっているかもしれません。

今、世の中には、そういった固定観念を押し付けられて嫌な思いをしている人がたくさんいます。「性同一性障害」と呼ばれる、簡単に言えば、体は女性でも

心は男性、体は男性でも心は女性という状態の人のことです。二〇一一年の厚生労働省の調査によると、日本国内の性同一性障害者は約四千人でした。しかし、その三年後、二〇一四年に北海道文教大が行った調査によると、日本国内の性同一性障害者は約四万六千人となっており、二千八百人に一人が性同一性障害者であるという計算になります。現在は更に三年が経っているので、もっと人数は増えていることでしょう。それだけ性同一性障害が認知され、世の中に受け入れられやすい環境が作られてきているということではないかと思います。今は、SNSで有名人となり、性同一性障害を知ってもらおうと活動している人もいます。日本国内だけでなく、海外の方とも、SNSを通して性同一性障害者だからこそその悩みを共有できます。技術の発展と共に、世の中の考え方や常識も目まぐるしく変わっていくのだということを、強く感じます。

私は、保育園児のとき、仮面ライダーが大好きで、プリキュアは大嫌いでした。女の子の友達がいた記憶はありませんが、男の子と丸めた紙でサッカーをしていた記憶はあります。女の子の間で流行っていた「家族ごっこ」という遊びに、ワンピースを着てくることを条件に何度か入れてもらいましたが、大体お兄ちゃん役でとてもつまらなかったのを覚えています。それは性同一性障害者と見られても、おかしくない外見や行動でした。もし、そこで、無理に「女の子らしくしなさい。」と強制をされていたら、「男の子になる。」と言って、今、制服のスカートを着用することを拒んでいたかもしれません。だから、良い意味で、自由に好きなことをさせてくれた周りの人には感謝しています。そんな私も、学年があがるにつれて、女子力を上げて魅力ある素敵な女性になりたいと思うようになりました。ありのままの自分を受け入れてくれている今の学校、友達、家族に精一杯の感謝を表現して恩返ししていきたいです。

性同一性障害のことに限らず、生き方や考え方は一人一人違うと思います。それぞれの個性を受け入れて、その上で自分の世界を広げることができたら、もっと良い世の中になるはずです。「常識」という概念を取り払って、広い視野で人と接してみたら、新しい発見があるかもしれません。私は、相手の気持ちを考えた言動、行動を心がけ、より多くの人々の個性を感じていきたいです。